
カヲルのノート

カヲル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カラルのノート

【Nコード】

N5310P

【作者名】

カラル

【あらすじ】

ここはイッシュ地方、
トウコやチェレンたちといった少年少女たちが存在しない別のイッシュ地方。

カノコタウンのカラル、カミツレはともに旅に出てカラルは自分探し、カミツレはそのサポートとして旅に出た。そこでカラルは自分の驚くべき真実を知る、。。。

エヴァンゲリオンとポケモンが交錯しているような世界。
そこであなたはカミツレの過去を知ることになる、

序（前書き）

初めまして。カヲルです。

発書きです。

初めての作品なのであまりうまくないと思います。よろしく願います。

ちなみにカヲルはカミツレに惚れています。

序

俺の名前はカヲル。

来年の1月で14歳になる。

最近の趣味は、、、特にない。

特に夢もない。

優れた才能もない。

そう、何一つとして他の人を圧倒するようなことはない。

俺は何のために生きているのだろうか？何をすべきなのか？

俺はそれを知るために今旅をしている。

さて、ここから先は俺の旅の様子をかこうと思う。

特に面白みもないだろうがよかつたら読んでくれ。

俺が住んでいるのはイツシュ地方。四季折々の表情がある地方としてゆづめいで、今は冬だ。

イツシュの南東にある「カノコタウン」、そこが俺の実家ともいえるべきであろう。

しかし、俺の産みの親は俺自身が知らない。

そう、俺はみなしごなのだ。

物心ついた頃から今の親のところに居た。

俺がみなしごであると知ったのは13歳の時のことだ。

夜中に親がこそそ話していたのを盗み聞きした。

だから俺は旅に出るのかもしれない。

何が旅の理由なのか？

「さて、準備できたしそろそろ出るか。」

「ちよつとまってー！」

「お、カミツレじゃん。どうした？」

こいつは俺の幼なじみのカミツレだ。

「旅に出るって本当!？」

「まあな、、、。」

全く、、、。こいつは前から心配性だな。

「なんで!?!なんで旅なんかに!?!」

「自分探し、、、だな。」

「もう!」

「ところでその荷物は、、、?」

「あたしも旅に出る!」

「、、、は?いやいやいや!おまえたびにでれるのか?」

「出るもん!」

、、、こいつは相変わらず強情だな。

「、、、あつそ。じゃあ出れば?」

「、、、。」

「どうした?」

「、、、一緒にいこう、、、。」

まさかこいつがこんなこというなんて、、、

「べ、別にいいぞ!」

「あれ?なんで赤いの?」

「バツ!ちげーよ!あついんだよ!」

「、、、今冬だけど?」

きにするな!

こんなんでいいのか、、、。

T o b e c o n t i n u e

破くカラクサタウンへく

「あゝ。よくねたー。」

く、く、本日の第一声を発したのはカミツレだった。

「あ、カヲル！もう起きてたの？」

「まあ、飯を作るのも俺の仕事だしな。」

く、く、こいつの作る飯は信用ならん。

前に調理実習でセンサーにこいつの食べ物を食べさせたところ

く、く、三日間寝たきりだった。

「あゝ！またカレー！？」

く、く、そのくせ食べるものにはうるさい。

「文句を言つな！次の町につくまでこれで我慢しろ！」

「ぶー！」

ハア、全くこいつといたら、く、く。

「次の町まで、く、く、歩いて3時間ぐらいだな。」

「く、く、く、く。」

こいつ、明らかに嫌そうな顔しやる。

「ゾロア！」

こいつは俺の相棒、ゾロアだ。

俺が拾われたときなぜか一緒についてきたんだそうだ。

「カミツレ、お前のエモンガの具合はどうだ？」

「うん！すつごく元気！」

「そうか、それはよかった。」

今俺らが居るのは1番道路だ。

こないだからわんさか野生のポケモンに襲われまくってる。

「でもなんであんなに荒っぽくなってたんだろう？」

俺も疑問に思ってたことだ。

どっかの博士が天変地異のせいだ。とかいってたな。

確か名前は、、

「ヘーイ！キミタチ！」

「きゃっ！」

「うわっ！」

「どうしたのキミたち？」

「だ、誰だよ、、？」

「オー！自己紹介が遅れたネ！私はアララギ！みんなからはアララギ博士って呼ばれてるわ！」

、、すげえハイテンションな博士だな、おい。

「きみたち！これからどこへ行くんだ？」

「え」と。

「カラクサタウンです。」

上から、アララギ、カミツレ、俺の順だ。

「オウ！キミたちもカラクサに！なら近道いきましょう！」

「そんな道が、、？」

（おい！カミツレ！）

「ん？何？」

（こいつ信用できるのか？）

明らかに怪しい。こんなやつが博士だなんてにわかに信じがたい。

「だいじょうぶだよ！近道教えてくれるんでしょう？だったらつい

ていきましようよ!」

、、結果的に楽したいんだな、こいつは。

「わかりました、じゃあ近道を教えてください。」

「そうこなくっちゃ!じゃあついてきて!」

森にはいつてかれこれ1時間、、。

「本当に近道なんですか?」

「カラル、何か変なおとがする(泣)。」

「オ、町が見えました!」

確かに近くから光が見える、、が、、

「なあ、カラクサタウンってオレンジ色に光るのか?」

「それは、」

その瞬間、頭上を中くらいの岩が轟音をたてながら飛んでいく。

「ロックブラストか!」

二発目がー今度はさっきよりも大きいーヒュウッとおとをたてとんでくる!

「ぐあっ！」

次の瞬間、どこからともなくドッカラーが現れ、

「コルルオーン！」

ドッカラーの岩砕き！

石は粉々に砕け散り、パラパラと音を立てておちる。

「コー！」

ドッカラーはそのオレンジ色の物体に近づき、
持っていた木で思いっきり殴る！

「グルアー！」

そういつてオレンジ色の物体は倒れた。

「こ、これは、ゝ。。」

そこに居たのはガントルだった。

「なんでこんなところにガントルが、？」

「おそらく天変地異のせいね。」

そういったのはアララギ博士だ。

「このガントルはパワーがみなぎり、背中のオレンジ色の結晶が光っていた。」

そのパワーの使い方を誤ってしまい、暴走してしまったのね。」

、、、やっぱりこの人はアララギ博士で間違いないな。

「ふええ」

、、、相変わらずこいつは、、

「大丈夫か、カミツレ？」

「う、うん。」

たいしたけがはしてないようだ。

「コルツ！コルツ！」

「お、ドッカラー。」

さっきのドッカラーか。

「仲間にしてほしいみたいネ。」

「、、、いいだろう。仲間にしてやる。」

「上から目線なのね、、。」

軽く笑いながらカミツレ。

「ふん。」

「オー！カラクサタウンね！」

「ほんとーだあー！」

「やっかついたか。」

「じゃあ私はこれで。」

「あ、アララギ博士ー！」

「おい、俺らはこっち。」

「、、、、」

そのとき、誰かが俺らを見張ってたことにまだ、俺らは気づいてなかった。

T o b e c o n t i n u e , , ,

破くカラクサタウンへ（後書き）

戦闘シーンどうだったろうか？

コメントしてくれるとうれしいです。

現在のポケモン

ゾロア ♂ 9 L V

ドッコラー ♂ 7 L V

破く一時の休息

「ふう。」

ここはカラクサタウンのポケモンセンター。

さっき仲間になったドッコラーの様子を確認し一息ついたところだ。

「もう遅いから今日はもう寝よう。」

「ああ、そうだな。」

もう時計の短い針はそろそろ「8」を指そうとしていた。

「じゃあ俺は風呂に入ってくる。」

…やはり風呂はいい。

体の汚れだけではなく心の汚れも落としてくれているようだ。

しかし…あの例の「天変地異」ってのは何なんだ？

気になる…が今考えても仕方がないだろう。

今日の前にある問題を片付けるべきだ。

「おい、お前ら。そんなに暴れるなよ。」

相変わらずドッカラーは元気十二分だな。

ゾロアは俺の横で丸くなってじっとしている。

「…こいつの特性はイリユージョンだったな。」

思い出すように言ってみた。

今から12年前…

「ぞらあゝ！いりゅゝじょんしてゝ。」

一人の幼い男の子がゾロアにそう言っていた。

…

…

…

何もおこらない…

「なんですがたがかわんないのゝ！？」

確かに。イリュージョンができるのであれば容易く変身できるはずだ。
なのになぜかゾロアのすがたはかわらない…

「ルー」

悲しそうにゾロアは鳴く。

話は戻り現在

（なんでこいつは変身しないのだろうか…？）

天変地異が関係してるのだろうか？
それとも何かほかに原因があるのだろうか…？

「まあ、イリュージョンが出来なくて困ることはないがな。」

…
！！

（そういえば一回だけ…！）

時が戻り、１０年前…

「うつ…えぐつ……………」

森のなかで一人の少年とその横に一匹の黒いポケモン…

この少年は森に迷い込んでしまいその黒いポケモンといっしょにさまよっていた…

「どこどこお…？」

「ルー…」

わからない、と行った様子で黒いポケモンが答える

「キー！」

「えっ！」

そこにはフシデというポケモンが三匹ほどいた。

リーダーだと思われるフシデが襲え！とでもいうような命令を下し…

…気がつけばゾロアと自分が一緒に野原に寝ていた。

記憶がとぎれとぎれにしかない。

しかし、一つだけ記憶にあるのが

エンブオーを見たことだ。

しかし近辺にエンブオーを持っているトレーナーも居ないし
野生に存在するはずもない。

「じゃああれは…」

現在

「あのエンブオーは…ゾロア…？」

真実は今でもわからない…。

その頃ベッドルーム。

「カヲル風呂あがるのおそいな」

そこにはカミツレとエモンガ。

「も〜！カヲル風呂あがるの遅いー！！」

彼女はせっかちなのだ。

「でも初めてカヲルとあったとき…」

8年前…

「カミツレ、カヲル君よ。ご挨拶なさい。」

「…」

カミツレは黙りこくっていた。

「どうして挨拶しないの？カミツレ。ほら。」

（でもこの人怖いんだもん…）

そう、このカヲルと呼ばれた少年はまるで目に光がなく、
いかにも睨みつけているような目つきなのだ

「これっ！そんなこと行ったらだめでしょう？」

この頃からカミツレは引っ込みじあんなのだ。

「じゃあ僕かえる…」

まるで子供とは思えないようなクールな返事をしたこの少年がカヲルである。

「あっ…」

現在

「あれ以来、会うといっつもさけてたな」

「悪かったな、さけられるような少年で。」

「あっ…」

ほとんど話を聞いていたという用な顔をしている少年がそこに居た。

「いやっこれはその…」

「もう寝るぞ。」

「う…うん。」

就寝。

「ねえ、カヲル。」

「俺は寝てる時に話されるのが嫌いだな。」

「あっ、ごめん！」

「…お前だったらいいけどな。」

顔を赤裸めながらカヲルがいう。

「えっ……。ん〜でもやっぱいいや!」

「……………」

……………あきれた顔をして寝に入ろうとするカヲル

「カッカヲル!」

「ん?」

「…お…お休み…」

「お…おっ。」

T o b e c o n t i n u e

破〜一時の休息〜（後書き）

番外編です。

ゾロアのイリユージョンが出来ない原因は何か…？

幼少期、カヲルに何があつたのか？

伏線張つたつもりです。

わかりづらいですね。（^^;）

コメントよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5310p/>

カヲルのノート

2010年12月25日19時38分発行